# 新刊紹介

井 上 真 理

**Agnes S. K. Yeow, *Conrad's Eastern Vision: A Vain and Floating Appearance.*** Palgrave Macmillan, 2009. 236pp.

本書は、コンラッドの「東洋の物語」を、その思想的な意図と文学的な手法の両面から考察した力作である。序章と 4 つの章で構成され、まず序章ではコンラッドのマレー群島を舞台にした作品に注目する理由が説明され、第 1 章ではそれらの作品をマレー史につきあわせて読むという本書の方針が示される。第 2 章では『ロード・ジム』のパテューサンという舞台とマレー人、第 3 章では「その他のパンタイ河の一団」について、その歴史的な文脈が考察される。そして第 4 章ではコンラッドの東洋の物語と、同時代のビジュアル・エンターテイメントとの関連性が示される。

各章ごとに内容を見てゆくと、まず第 1 章「不明瞭な観念の衝突」(The Collision of Indistinct Ideas) では、コンラッドの描くマレー群島が、実在するけれどもロマン化された空間であるという従来の解釈に反論を試みる。すなわち、コンラッドの物語がマレー世界の風物と歴史を忠実に再現したものであること、と同時に、その芸術的な手法によって、いつも最終的な意味を語らない「空虚で浮動的な外観」(副題と同じ) にとどめられていることに注意を促している。

例えば、『ロード・ジム』のパトナ号事件で、800 人のイスラム巡礼がシンガポールから出航してゆくシーン。一見、何気ない背景描写のようでありながら、著者は、パトナ号が蒸気船であったことと、巡礼の数が 800 人もいたという 2 つの事実の重なりに注意を促す。英領マラヤの本拠地になったシンガポールは、昔からイスラム教徒のネットワークの中心地であった。しかし、これほど大量の巡礼が見られるようになったのは、蒸気船がこの地に普及してからであり、したがって、この「800 人のイスラム巡礼」という存在じたいが、マレー社会の伝統のなかに、東洋の近代化＝植民地

化がすでに違和感を与えないほどに浸潤していた事実を、象徴的に示すものとなっている。

章の後半では、コンラッドのマレー小説から引き出すことのできる、4つの主要な歴史的背景について解説する。すなわち、交易、政治、海賊、そしてイギリスとオランダの覇権争いである。著者は、この4つの背景は、コンラッドの小説を読むとき必要不可欠な基本的知識になるといっている。例えば、ブギス人の侵略と大規模な海賊行為は当時のマレー世界におけるひとつの「国家行事」であり、マレー世界の停滞化をふせぐ役割を担うものでもあったこと、しかしそれがバタビアを中心とするオランダと、シンガポールを中心とするイギリスの支配が確立するにつれて失われていったこと、いっぽうリンガードのような海上交易の白人パイオニアたちもスエズ運河と蒸気船の増加によってその活動の場を失っていったこと、リンガードが独占した「グッタペルカ」とは当時海中ケーブルを保護できる唯一の天然素材だったこと、などが指摘される。さらにまた、コンラッドがイギリスとオランダの権益が完全には確立されていない、一種のグレーゾーンに物語の舞台を意識的に設定していることも強調している。

第2章「パテューサンとマレー人」(Patusan and the Malays) は、第1章の内容を受けて、『ロード・ジム』のパテューサン・シークエンス (24章以降) から引き出すことのできる歴史的な文脈を示す。すなわち、マーロウの語りにみられる hikayat というマレー史特有の語りの影響、ジムと植民地支配者の類似、物語の舞台であるパテューサン社会の権力構造、そしてマレー人たちの描写にみられる歴史的正確さなどが指摘される。

著者は、パテューサン・シークエンスが、Malay hikayat と呼ばれる伝統的な歴史語りの手法に酷似していると指摘する。その手法は史実と民間伝承を融合させたもので、マーロウの西洋的な視点と、現地人的な視点を両立させるために用いられているという。さらに著者は、『ロード・ジム』がイギリス植民地支配のアレゴリーとして読めることを指摘する。ジムと大英帝国の共通点は、現地人の「保護者」として統治しているという建前と、その支配が支配される側の論理にむしろ依存していることにある。その根拠として、マーロウが Tuan Jim を Lord Jim と翻訳していること、また彼がジムのことを支配者に「なった」存在というよりは支配者に「された」(made)

存在として見ていることは、マレー人支配者である *Yang di-Pertuan* が "He who is made lord" という意味をもつことと関係があるのではないかと論じている。

さらに、ジムが支配したパテューサンは、18 世紀以降の典型的なマレー社会の構造をしているといえる。すなわち、土着のマレー人、ブギス人、アラブ人の 3 つの勢力が拮抗し、それをとりまとめるような支配者が存在しなかった。その権力の空白地帯に飛び込むことで、現実にも多くの白人ラージャが登場した。また、同じマレー人でも、カレインのように呪術や護符を好み、白人の「不可解」な行動を「魔法」によるものと解して、その支配を受け入れていたグループと、キリスト教徒を精神的に退行し停滞した人々とみなして、白人の支配を受け入れなかったグループもいた。ここでも、穏健派の土着マレー人と、アラブ人や、「ハジ」と呼ばれる巡礼帰りの厳格なイスラム教徒の違いが捉えられている。

第 3 章「その他のパンダイ河の一団」(The Rest of That Pantai Band) では、先に検討したマレー人をのぞく、現地人の歴史的な文脈が明らかにされる。すなわち、中国人、アラブ人、ユーラシアン(混血児)である。彼らに光をあてることにより、本国との差異だけを指標に植民地主体を記述しようとしていた「帝国の目」に対して、コンラッドの物語が一種のゆさぶりをかけるものであったことが明らかにされる。

中国人は、長らく植民地経済を支えてきた結果白人に同化する者が多く、白人としてふるまう者もいた。しかし、彼らにはアヘンという「堕落」の標(しるし)がつきまとったため、「ホワイトネス」や「イングリッシュネス」といった支配者の標章を汚すものと受け止められていた。いっぽうアラブ人は、イギリス人にもマレー人にも同化せず、その宗教的な指導力と独自の商業ネットワークによって、イギリス人と同様にマレー人への支配的位置を占めていた。そのためイギリス人からは密かに対等なライバルと見られていた。ユーラシアンは、白人からもマレー人からも疎外されていただけでなく、白人からは、不完全な白人であるがゆえに常に白人に同化しようとする「手に負えない」存在とみなされていた。ただし、コンラッドがモデルにしたボルネオ(名目的なオランダ領)では、ユーラシアンや西洋人の配偶者を法律上は「西洋人」として登録するという措置が採られていた。

したがって、彼ら「その他の一団」こそが、むしろ植民地問題の中心的な争点であったのであり、コンラッドがその問題の多様性を捉えていたことを著者は評価する。例えば、現地生まれの白人オルメイヤーとジム・エンは、最後にはアヘンを介して潜在的に対等になる。他にも、アルフロ人を「併合」し、さらには白人ヘイストに取って代わろうとする中国人ワン、大英帝国と汎イスラム帝国のメトニミーともいえるオルメイヤーとアブデゥラの長い闘争、「西洋人」であるにもかかわらず混血であるために現地人から Tuan ではなく Inchi（Mr）と呼ばれるコルネリウス、オランダの寛大な法律によって恩着せがましく与えられた「西洋人」の地位に不満をもつ混血のオルメイヤー夫人など、確かにコンラッドは現地人の複雑な民族状況を史実に忠実に取り入れている。中でも最も興味深い人物が、ユーラシアンであるニーナである。コンラッドが彼女にマレー人としてのアイデンティティを選ばせたことは、混血児に対する植民地の前提を覆すだけでなく、西洋的な家父長制をのりこえ、さらには白人／非白人の二項対立に囚われない別の価値基準（ここでは結婚における嘘のなさ）を示唆するものとして、評価されている。

第 4 章「空虚で浮動的な外観」（A Vain and Floating Appearance）では、前章までにみてきたような「帝国の目」を相対化するための手法として、コンラッドがジオラマやパノラマといった、当時のエンターテイメントの手法を用いていたという新解釈が打ち出される。章の前半では、コンラッドのそのような手法が、19 世紀末に一般に浸透した見ること（seeing）の近代化に対する、文筆家としての挑戦であったことが論じられる。後半では、具体的な例をあげて、テクスト中に視覚的なレンズや鏡に相当するものが効果的に配置されている様子が考察される。最後に、作者コンラッドをイリュージョニスト（奇術師）／プロジェクター（幻灯機）として捉え、マレー世界の「マジック・サークル」（『勝利』『島の流れ者』『救助』）を彼の見せる視覚空間として読むことができると述べている。

1890 年代は、「真実」が見る者の主観に依存するものであり、視覚それじたいが文化的構築物であるとする視覚の観念化が標榜された時代であった。そして彼の本を読んだのは、高度なビジュアル・エンターテイメントと商業的なイメージの再現・複製に日常的に興じる人々であった。コンラッド

はそのような読者にアピールするために、「絵に描いたような」東洋のイメージと「視覚の当てにならなさ」をともに強調する物語を書いたのである。そのため、東洋の物語には、目および心の目の盲点や歪みや空白（見るべき記号がないことによる）がさまざまな形で登場する。それが彼の東洋を、そこに身を置く白人たちも含めて、持続性がなく、不安定で、誤読されやすい世界にするのだと著者はみる（「空虚で浮動的な外観」）。

その一例として、『万策尽きて』のウェイリー船長があげられる。彼の視覚には、衰えと歪み（それぞれ海のパイオニアとしての知識の有効性が失われてゆくことと、家父長的な見方を象徴する）だけでなく、盲点もある。例えば、彼が船上から浜辺の漂海民を眺める一節がある。そこでは「写真」を想起させるようなくだりがあり、彼の位置からは死角に入るはずのものが同時に書き込まれていることが指摘される。つまり、読者にはそれとなく彼の視覚の盲点が示唆されているのである。このようにして、コンラッドの小説では観察者の視覚（以前は客観的な事実と思われていたもの）の不完全さに注意が向けられるのである。

こうして見てくると、本書の言う Conrad's Eastern Vision とは、コンラッドにとっての「東洋」であると同時に、コンラッドを介して見せられる視覚空間でもあることがわかる。その「空虚で浮動的な外見」または「まぼろしのような光景」(hallucinated vision) とは、歴史とフィクションをモザイク的に融合した主観的な「写真」であり、「帝国の目」による公式的な歴史を相対化するイメージやストーリーの断片によって構成されている。そのような写真、あるいは映像を、ビジュアル・エンターテイメントのように読者の目に再現し、見る者の目（心の目）の特異性に合わせて、主観的に本物らしい映像を結ばせる。そのような装置がコンラッドの小説なのであり、コンラッド自身その装置の一部になっている。本書が提示するコンラッド像は、おおよそこのようなものと解される。

本書の第 1 の特色は、コンラッドの「東洋もの」を、東洋の視点から読み直したことである。コンラッド文学における他者／東洋の重要性を示した意味で、この本じたいにポストコロニアル的な意義がある。しかも従来のポストコロニアル理論にありがちな白人対現地人という二項対立に陥らず、むしろ両者の類似性と相互依存性、潜在的な対等性と結束の可能性、

さらに「われわれ」と「彼ら」の両方の多様性を示している（とくに第 2 章、第 3 章)。近年コンラッドのレイシズムに対する再検討（弁護ではなく）が広く関心を集めている中で、著者ヨウの読み方は、コンラッドがむしろ人種的偏見をもっていなかったことを主張するものである。そして、コンラッドにとって「人種」(race) とは、排他的な言葉ではなく、逆に人々を結びつけたり、包括的に呼んだりするための言葉ではなかったかと述べている。西洋人を "the western race"、マレー人を "(the) race of men" と呼んでいることにもその一端がうかがえるだろう。白人に対する「パンタイ河の一団」も同様に偏見のない、白人と対等なグループとして扱われている。

しかし、ヨウによると、「マレー人」という人種的概念じたいが植民地政治によって構築されたものであり、流動的なマレー群島に住む人々にはもともと領土的な帰属意識が希薄だったというから、アルフレッド・ウォレスを愛読したようなコンラッドが人種という概念に敏感だったとしても、不思議はない。そして本書によれば、現代のマレー世界にとって、コンラッドの物語は、西洋（白人）中心主義でない世界の可能性を示しているのみならず、植民地化以前の同地域の多様性を思い出させてくれるという点でも重要な意味をもっている。これは『闇の奥』を原典のひとつとして始められたポストコロニアル理論がひとまず定着したあとの、コンラッド文学の新しい読まれ方を指し示しているように思われる。

第 2 の特色は、2006 年に刊行されて反響を呼んだ、スティーブン・ドノバンの『コンラッドと大衆文化』を、イリュージョニストとしてのコンラッドという作家像にまで発展させたことである。これは、「あなたがたに見せること」という、それだけではどのような意味にも取れるコンラッドの芸術的手法について、新しい解釈を示すことになった。すなわち、コンラッドは言葉のイリュージョニストとして、読者に「空虚で浮動的な外観」を提示するにとどめる (merely to envision) 作家であったという解釈である。もちろん従来から、コンラッドのテクストは意味が「閉じていない」ことで評価されてきたが、ヨウの議論はそれをより視覚的で立体的なものとして捉えたところに新しさがある。それはコンラッドの時代に即した解釈であるように思われる。コンラッドを何度も研究のために読んでいると忘れがちな、彼の作風の原点ともいえる絵画的という特徴を思い出させてもく

れる。ちなみに、ヨウは衝突する「不明瞭な観念」を "history ('facts') and art (fiction)" という抽象的な概念で言い換えているが、これはドノバンの "one documentary and 'realist,' the other selective and imaginative" (61) とあわせて考えるほうがわかりやすい。

最後に、「東洋もの」からは離れるが、序章によると、コンラッドが「マレー段階」の感性を、コンゴの物語にも引き継いでいたことが示唆されている。そうだとすると、著者の示したような白人支配の偶然性は、『闇の奥』にもあてはまる可能性があるように思われる。評者の知る限り、アフリカの歴史資料にもとづいてクルツの支配の実態を考察したものはまだないように思う。しかし、支配者がある意味で囚われの身でもあることや、部族間の権力の空白に偶然にもおさまってしまった白人という構図、ひとつの習俗として遠征・戦争・略奪を捉えることなど、共通するところが多いように思う。クルツの王国はジムの王国とはくらべものにならないほど曖昧であるが、執筆時期からしても『闇の奥』が『ロード・ジム』の延長上にあることはまちがいなく、ジムの王国についてのヨウの考察を、クルツの王国の理解に援用することには十分可能性があると思う。

さらに、本書で論じられたコンラッドの物語における視覚の主観性を念頭に置くと、マーロウがクルツの屋敷前の生首をまさしく視覚の操作機である双眼鏡を通して見て、たちどころにそれをクルツの非道な殺戮や非効率の決定的な証拠とみなしたことには、大きな問題性を感じ取るべきではないかという疑問が生じる。なぜなら生首というものが、現地人の習俗に照らしてみた場合どのような意味をもつかについては、何も語られていないからである。ちなみに、マーロウはクルツにその意味をたずねていないし、ハーレキンも確たる答えを返すことはなかった。クルツは確かにライフルをもっていたが、弾は山のように残っていた。つまり、マーロウはその生首をすぐに固定化した事実に変えたが、この虚ろな生首は、本当はマーロウが押し付けた記号を取り払って、そのままのものとして見るよう読者に残された「思考の種」(food for thought) だったようにも思えるのである。

本書は、コンラッドの研究書にしてはめずらしく、表紙の全面にマレーシアの浜辺の写真が直接プリントされている、図書館に入ってものっぺらぼうになることのない美しい装丁の本である。はじめは、波間に浮かぶ黒

い影の部分が副題と何か関係があるのかとも思ったが、ふとこの表紙がいかにも私たちの思い描く南海のイメージであることに気がついた。真っ青な空と誰もいない浜辺。このようなイメージを思い浮かべるとき、私たちにはマレー社会の何が見えなくなっているのかと、しばし考えさせられた。

（いのうえ まり　跡見学園女子大学兼任講師）